白山ふるさと文学賞

第十二回　白山市ジュニア文芸賞　受賞作品

【島清部門】

小学生3・4年　小説の部　最優秀賞

「白山ジオ大ぼうけん」

東明小学校四年　前川（まえかわ）　葵（あおい）

青い空、太陽を頭の上に乗っけたような暑さ。夏休みものこすところあと二日。日本中の小学生の半分はたぶん宿題をしているところだと思う。もちろん私もその一人。

私の名前は大石このは。白山市に住む小学四年生。八月のおぼんからずっと、五才の弟の空といっしょに白峰のおばあちゃん家にいる。

私は、おばあちゃんが作ってくれた朝食の最後の一口を飲みこむと、すぐに宿題を始めた。白山市について調べる宿題を全くやってなくて、大ピンチだったからだ。

しばらく本とにらめっこしてがんばっていたけど、目がいたくなっていやになってきた。

「あーつかれた。少し外で遊ぼー。」

私はおばあちゃんにおでかけすることを伝えて、空と遊びに行った。

「明日はもう白峰のおばあちゃんの家から帰る日かー。」とか考えながら、白峰河川公園で空と鬼ごっこをして遊んでいた。しばらくして私はトイレに行きたくなって、空に

「トイレに行ってくるから、ここで待っててね！」

と言うと、私は走って行った。

しばらくしてもどって来ると、公園に空がいなかった。あちこちさがして、ふと横の川の方を見て、私は息が止まりそうになった。

「空!!」

空が川でおぼれていたのだ。

「助けなきゃ！」

私は体が勝手に動いて、川に飛びこもうとした。

そのしゅんかん、

「待って!!飛びこんだら、あなたもおぼれてしまうわよ!!」

とつぜん女の子の声がした。

「え？」

「私がやるから！」

女の子がそう言うと、いきなり川の水がバシャーン！ときょ大な人の手の形になって、空をつかんで私の所におろした。

私は、安心して泣きながら空のことをだきしめた。

「おねえちゃん、こわかったよ～。」

空も号泣していた。

「よかったね！」

私は声のする方を見た。しかし、目線の先にはだれもいない。

「あれっ？」

しかし、下の方を見ると、ジュースの缶くらいの小人が立っていた。

「あなただれ？」

私はおどろいて、お礼よりもしつもんが先になってしまった。

「私は白山市の水のようせいだよ！」

私は、ようせいは本当にいるんだ！と、びっくりした。

「私は、大石このはだよ。弟を助けてくれてありがとう！」

私がじこしょうかいをすると、空も大きなこえで、

「ぼくは、大石空だよ!!」

と元気に言った。

「大丈夫そうでよかった。二人ともよろしくね！」

ようせいが私たちを見て、ニコッとわらった。

「うん！よろしくね！」

私は、ようせいに、ニコッとわらいかえした。そうして、私たちは友達になった。

ようせいが、空に服の水をとばすま法をかけてくれて、しばらくの間三人で缶けりや、なわとびをして遊んだ。そして、私はふと宿題が

終わってないことを思い出した。
「あっ、そろそろ私たち家に帰らなくちゃ！」
「どうして？ぼくはまだ帰りたくない！」
空は、耳がキーン！とするほど大きな声で言った。
「でもね、お姉ちゃんは、白山市について調べる宿題がまだ終わってないんだ。」
「ヤダ、もっと遊ぶの!!」
「でも、難しくて全然進まないから、いっこくもはやく帰ってやらないと…。」
「ヤダヤダヤダッ!!」
私はとても困ってしまった。
すると水のようせいが言った。
「あの…もしよかったら、私が白山市のおすすめスポットに連れていってあげることもできるけど…。」
「いいの？お願い！」
私は、迷わずそう言って、ようせいの手をにぎりしめた。

そして私たちは、ようせいのま法で水に包まれた。ふしぎとぬれないし、息もできる。そして、すごいスピードで飛んで行って、すぐに白山白川ごうホワイトロードにあるじゃ谷という場所に着いた。
「きれい!!」
青々としげるブナやミズナラの林の向こうに、細い水が幅広く、何百本も流れている滝があった。
「この滝は、うばが滝という名前だよ！流れる水が、しらがのおばあちゃんのかみの毛みたいに見えるでしょ！」
ようせいは、得意げに言った。
「本当だ、すごいね！」
と、私が言ったしゅん間、ようせいが指をパチン!!と鳴らした。すると、私たちは、なぜか水着すがたになっていた。私と空が、びっくりしていると、ようせいが右下を指差した。
「親谷の湯だよ。」
私と空は、それを見ると、顔を見合わせて言った。
「温泉だ！行こう！」
バシャーン!!温泉はとうめいで、少しぬるかった。温泉につかりながら、お空の青と木の緑、そして滝の白の、絵のような景色をいつまでも見ていられるような、いい温度だった。

温泉から上がると、また水のようせいのま法がかかって、水に包まれた。そして滝の真下に来た。
「わっ!!すっ、すごい!!」
「おねえちゃん、とてつもなく大はくりょくだよ!!」
滝の下をくぐりぬけると、ようせいは言った。
「そしたら次は、水の生まれる所を見に行こう！」
「レッツゴー！」
そうして、私たちはじゃ谷を、滝と反対の方へ登って行った。とちゅう、天然のウォータースライダーで遊んで、空の水着のおしりのところが少しやぶれた。

「着いた！ここだよ!!」
行き止まりみたいになっている岩のかべに、しめっているところがあった。
「ここ？」
「うん、そうだよ！水がしみ出しているでしょ。飲んでもいいよ!!」
「わーい!!」
空がのどがかわいていたのか、とても喜んで飲み始めた。
ごくごくごくごく！
「すごくおいしい!!」

空が大空にひびきわたるほど大きな声で言った。私はこけにあたった水なんて飲みたくない！って思ったけれど、弟が、すすめてくるから、仕方なく飲んだ。飲んだしゅん間私はとてもおどろいた。
「いつも飲んでいるお水よりもおいしい!!」
すると水のようせいは、じまんげに、
「ここ、私のおすすめの場所なんだ!!」
と言った。
　私は、手取川のあのたくさんの水にも、最初の一てきがあることを、初めて知った。
　そして水のようせいは、なぜか今度は私たちだけを水の玉に乗せて、
「また後でね！」
と、言って飛ばした。

　目的地にはすぐに着いた。また川だった。でも、さっきのところよりもずっと広い。
「ここ、どこかな？」
「あ、あれ？水のようせいは？」
私たちがとまどっていると、後ろの方から低い声がきこえた。
「水のようせいはいないけど、おれならいるぞ。」
「わー!!お化けだー!!」
「おねえちゃん、こわいよ～!!」
私と空は、泣きそうな声でさけんだ。
「失礼な、おれは岩のようせいだぞ!?水のようせいのやつに、岩の事教えてやれって言われてんだよ!!」
「ふーん、岩のようせいも水のようせいといっしょで、小さくてかわいいのね！」
私がそう言うと岩のようせいは、
「さっきまであんなにこわがっていたのに、正体が分かったら、かわいがんのかよぉ!!」
と、怒りながら続けた。
「こう見えてもおれの方がずーっと年上だからな!!」
「こんなにかわいいのに？」
「うん、ぼくもかわいいと思う。」
「かわいいって言うなよ。じゃあ二人は何才なんだ？」
「十才だよ！」
「ぼくは五才だよ!!」
私たちは自信まんまんで答えた。
「わっか！おれは八十九才だぜ！」
「えっ!?その見た目でおじいちゃんなの!?」
「八十九？え？じょーだんだよね！おねえちゃんもそう思うよね？」
「いや、おれは本当の事を言ってるの!!」
私は、ふと「人は（この子はようせいだけど）見た目ではんだんしちゃいけないよ。」というおばあちゃんの言葉を思い出した。おばあちゃんの言う通りだ。そんなことを考えていると、岩のようせいは話し始めた。
「わしゃのぅ、あの岩のようせいなんじゃ。」
ようせいの指差す方を見て、私たちはびっくりした。だって、ありえないくらい大きな岩が川の真ん中にあるんだもん。
　ようせいは、ほこらしげに言った。
「これはのぅ、百万がんの岩と言って、高さ約十六メートル、周囲約五十二メートル、重さは約四千八百トンもあるんじゃ。石川の力士の遠どうが、約百五十キロじゃから、遠どう約三万二千人分と同じ重さじゃな。」
私は、おすもうさんが何人いたら、この大きな岩をより切ることができるのだろう？と、イメージしていた。すると、ようせいは続けた。

「千九百三十四年七月十一日の手取川大洪水で、上流から三キロメートルも水の力で流れて来たんじゃぞ!!」
「え!?これが三キロメートルも!?」
水の力の大きさに、私は目ん玉が飛び出た。ところで、ひとつさっきから気になっていることがあった。私は勇気を出して、聞いてみた。
「なんでいきなりおじいちゃんみたいなしゃべり方にしたの?」
「えーっとねぇ、その方がいげんがあるかとおもって、うん、おれの話はこれでおわりだぜ。」
岩のようせいは、はずかしそうにあっちを向いて言った。そして、ギラギラリーン!!と、岩のようせいは、ま法を使って、私たちを岩のちゃわんみたいなものに乗せた。私と空は、
「ありがとう、岩のようせいさん!!」
と言ったけれども、たぶん最後まで言い切る前に飛ばされたと思う。

　またいどうした!!と、思ったら、ふるい家の前に立っていた。
「おねえちゃん、ここどこ?」
弟がおびえた声で言った。
「こんにちは。」
「こんにちは。この洋服は、文化のようせい?」
「大当り!すごいよ、どうして分かったの?」
ようせいが、うれしそうに聞いてきたので、私もうれしくなって答えた。
「だって、おばあちゃんが持っているのと同じ、牛首つむぎの着物を着ているから。」
「牛首つむぎを知っているなんてうれしい!!カイコのまゆは一つに一頭なんだけど、牛首つむぎはときどきできる、一つに二頭のカイコが入った「玉まゆ」っていうのも使うからからみ合った糸が、他の糸とはちがう、いいかんじのぬのになるの。先祖伝来のわざなのよ。」
「へーそーなんだ!!」
「ためになったね!!おねえちゃん!!」
「きょうみもってくれるの?うれしい。」
　そうして、文化のようせいは、私たちに、白山ろく民俗資料館をあんないしてくれた。杉原家は、二階と三階が養さんのために広い場所になっていて、天井が、ふつうの家よりとてもひくくて、びっくりした。空が走り回っていた。そのあとようせいに、おこられていた。
　ようせいは、時計を見てあわてて言った。
「あ、たいへん、おひるごはんの時間だ。」
私はおばあちゃんが、心配していたらどうしようと不安になった。
　文化のようせいは、いそいで私たちに牛首つむぎの着物をきせて、
「これでお空を飛べるよ!!」
そう言って、私たちをおばあちゃんの家の前までおくってくれた。お空の旅はおちそうですごくこわかったけど、すごくたのしかった。

　私たちは、
「ただいま!!」
と、言って帰ると、おばあちゃんが、
「おかえりなさい。ちゃうどお昼ごはんができたよ。」
と、むかえてくれた。
今日のメニューは、ネギみその入ったあげをやいたものと、かたどうふと夏野菜のみそしる、そしてあゆのしおやきと白ごはんだった。
「いただきます!」
私はとてつもなくおなかがすいていたので、最初の一口が、とてもおいしくて、幸せな気持ちになった。あゆの身はふっくらしていておいしいし、あげは、カリッジュワッとしていて、大好きな味だった。
「おばあちゃんのとうふって、なんかママのとちがうね。」
と、空が言った。私も同じことを思っていた。

「うん、なんかかたいよね!!」
「よく気がついたね！かたどうふはね、ふつうのとうふよりにがりを強くして、重い石をのせてしぼるからとてもかたくなるんだよ。縄でしばってもくずれないし、「ぶつかったらケガをする。」とまで言われているほどやね。」
おばあちゃんは答えた。
「とうふでケガ?おかしいね！」
私たちは大わらいした。

ご飯が終わって、後片付けが終わったころに、おばあちゃんの友達の雪子さんがきた。
「美江ちゃーん、暑いにゃあ。こんキュウリやらトマトやら…」
「あっら～、雪ちゃん。よしたい。」
二人はとっても仲良しみたい。雪子さんが私たちを見て聞いた。
「こん子ら、松任のまごさん?」
おばあちゃんが答えた。
「しゃんじゃ。」
「あら、けっこうなぁ～。」
「ほんじゃよしたい、のいの～。」
「のいの～。よしたい。」
雪子さんは、風のようにさっていった。そこに、水のようせいがやってきた。
「あら、雪子さん来ていたのね。」
「知り合いなの?」
「うん、雪子さんは、もともとくわ島地区に住んでいたんだけどね、昭和五十五年に手取川ダムができて村が水にしずんじゃったんだ。だから、こっちに引っこしてきたんだよ。」
「えっ、村がしずんじゃったの?」
私はおどろいた。
「うん、くわ島は二百くらいの家族が住んでいたんだけど、引っこすことになって、この辺りに住む人、つる来の新くわ島に住む人、金沢や野々市に住む人と、みんなバラバラになっちゃって、雪子さん、そのときはいつも川を見つめながら泣いていたから。」
ようせいはかなしそうに言った。
「そんなことになるんなら、なんでダムなんかつくったんだろう?」
私はぎ問に思って聞いた。すると、ようせいは言った。
「私もダムを作るのはイヤだと思っていたんだけど、水害でたくさんの人が死んでしまったところを何度も見てしまっているから、水害をへらすためならしかたない！って思うようになったんだ。あと、生活やお米作りの水が足りなくならないように、調せつしたり、水力発電で電気を作ったりもできるからね。」
「へー。そうなんだ。」
私はふくざつな気持ちになって、何も言えなくなってしまった。

その後、私は今日見てきたことをパソコンで、発表ノートにまとめていった。水のようせいが手伝ってくれたから、すぐにおわらすことができた。
宿題が終わって、おやつにとちもちを食べた。おばあちゃんが私たちの様子を見て、水のようせいの分も用意してくれていた。
「ものすごーくおいしい。お家に帰ったら、こんなおいしいものが食べられなくなるなんて…。」
空ががっかりしている。私もとちもちが大好きだけど、ずっと雪子さんのことが頭からはなれなかった。
「ねえ、ようせいさん。もし自分のお家をこわされちゃったらって考えたら、やっぱりぜっ対イヤ、ダメッて思っちゃうんだ。それがたくさんの人のために、どんなに必要なことだとしてもね。」

ようせいは私のかたに乗って、頭をなでながら言った。
「やっぱりそうだよね、私も自分の思い出がつまった川が変わってしまうと分かったときは、やっぱりすごくかなしかったよ。あっ、手取川総合開発記念館に行ってみようか。」
　そうして私たちは記念館に向かった。空はお昼ねをしていたから、おばあちゃんとおるすばんをしてもらうことにした。
　記念館には手取川ダム建設のために、水没した白山ろく地いきの歩みがてんじされていた。私と同じ気持ちで、ダムの建設に、反対した人もたくさんいたそうだ。でも、ダムは建設され、三百四十五この家が水没したことが分かった。くわ島集落の水没前と水没後の写真には、むねがしめつけられる思いがした。でも、ダムの完成後、今までにダムで、百回い上もぼうさいのためのそうさが行われていて、私たちの安全を守ってくれていることが分かった。
　ようせいは、私を家まで送り届けてくれた。
「秋の紅葉の季節にまた来てね。水にいろいろな色をうつし出して待っているからね。」
そう言ってようせいはえ顔で帰っていった。今日出会ったようせいのみんなには、感しゃの気持ちでいっぱいだ。

　夜ご飯の後、私は宿題のまとめのページを開いていた。そして、昼間にようせいと書いた。そして、まとめの最後に、「私たちのあたり前の生活は、白山のゆたかな自然や、人々のれきしや文化とつながっている。」と書き足した。